

國民の自重を要す

目次

國民の自重を要す (念)

求道者の態度 土屋觀道

遇感 一二 土屋觀道

道友の訃に接して

土屋觀道

吾朋便り

▽ お念佛を初めると、金持でも、貧乏人でも等しく「念佛人」になつて了ひます。

▽ お百姓でも商賣人でも等しく念佛人、年寄りでも若い者でも等しく念佛人、男でも女でも同じく念佛人になつて了ひます。

▽ 金持でも金持ち振らなくなるし、貧乏人でも貧乏人らしく卑屈になりません、主人でも主人顔せず、店員でも店員らしく思はぬやうになり、皆が同年輩、同職業、同身分のやうな氣になつて來ます。男でも女でも、そう男だ女だ区別を感じなくなります。

▽ 即ち「念佛人」の世界には普通の差別關係、階級觀念を絶して「同入和合海」の一味を感じます。これが「同朋」とか「同行」ミカ云はれる強さで、宗教的團結の根幹、宗教的行動の根柢をなすものであります。

▽ 普通の団体とか、組合とかいふものは、或る規約、或る事業、或る趣味、或る利益關係などで集團してゐるのだから、其中心事業の變化の爲めに容易に出來たり、壊れたり消長します。而し完全なる宗教的團結の場合は、中心の信念に因つて個々が、「活きた個在」にされてゐるから、一人や二人、反逆者が出來たり、中心本尊や伽藍宗規などが破壊されたり、奪はれたりしても、容易に全体として壊はれません、少くとも完全なる「個在」——「念佛人」になつてゐるものは揺れません。これが「信念」に因つて活き、「信念」そのものになつてゐる者の尊さであります。願くば本當の「念佛人」になりませう。(勉)

□ 本月の十日は我が 今上陛下の即位式の當日に當る。恐くは上下を通じて、此の盛事を祝はない民はなからう。朝野を分かつたず、家毎に奉祝の國旗をかかげて、一同其の喜びを表象するのは何よりの其の証據だ。

□ 乍然、私共の心から願ふところは此の奉祝の心をして單に一時的に止まらしめず、永く此の心を体して、帝國の將來を思い、深く各人の生活を反省して、各その分に忠實なることである。

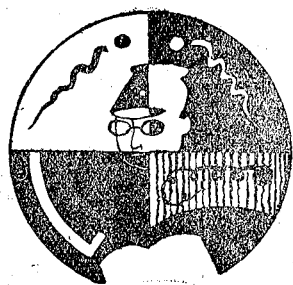
□ 若し然らずして、單なる一時の奉祝氣分に捕はれて、徒なる一時の御祭りさばぎに終ることでもあらば今日の日本は決して喜ぶべきの秋ではない。少くとも今日の日本は其の思想の上に於て、果たまた經濟生活の上に於て、其他外交の上にも決して未だ樂觀を許さない秋である。

□ 殊に私の最も憂いて止まないものは、今日の社會思想の惡化である。そこには所謂階級の鬭争あり、思想の衝突があつて、上下相和せず、父子相反するの思想であり生活である。従つて私共は此の際之等の思想生活の不安が今日の御大典を中心として全く除かれたものと思つてはいけない。

□ 少くとも上下を通じて、此の 陛下の御即位を奉祝するかたわら、之に對するあらゆる不敬事件の興發を防ぐ可く幾多の努力と警戒がその中にもされてゐることを忘れてはならない。換言すれば今日の社會は決して之で安心と云ふべきの秋ではない。

□ 而て、かゝる不安はそもそも何によつて起つて來るのであらうか。そこには必ずよつて來るところがなくはない。而してそれは主として、上は下を思はず、下は上を思はぬ。所謂各人の生活の利己主義よりそれが發生した云はねばならない。

□ 之私共が實に上一致の生活を主張して止まぬところである。君民が一体であり、萬民が同朋である限り、私共の生活は今少しく上下相和し、同朋相信するの道がなくてはならない。(念)



求道者の態度

土 屋 觀 道

一、人生は何を求むるのか

私が近頃一番氣になつてならないのは世間の人々がたゞ徒に其日暮しをしてゐることです。彼等は殆ど其の日の生活に追いまわされて、未だ一度も自分が何の爲めに生きてゐるかさへ考へたこともないやうです。事によると、世の所謂宗教家だとか教育家だとか云ふやうな人々までが、其の日の生活に追いまわされて人生の意義を考へる暇がないことです。

而も之はあながちに私ばかりの心配ではありませんまい、恐くは少しでも此の世の事を心配する人ならば誰でもが等しく氣付くことではないかと思ふのであります。私は近頃になつて殊にかうしたことが氣になつてなりません。尤も之は必ずしも近頃に始まつたことではないが、私の歳のせいかな近頃一層深くこのことが思はれるやうになりました。

殊に永年多くの人々に接して、其の社會を見た私には一層かうした人々の生活がよく見えるのであります。其の人の多くは此の世の肉慾や財慾、若くは目前の名慾に捕はれて、其の日を享樂しやうとする人が多いのであります。乍然之は主として、多くの人類が未だ充分に發達しない爲めであつて

自らの生活を深く反省することがないからであります。即ち未だ一偏でも自らに生存の意義も反省せず、又自らに人生の一生をも考慮することがないからで、そこには何の爲めの人生であるかも考へられていないのです。

そこで私は思いました。之は一つ誰でもが先づ自分の生活の何ものであるかを反省すべきである。そして、一体自分は何の爲めに生きてゐるのか、又何を求むべきであるのか、深く自分の生存の意義を反省することが大切であると。

それに就て、私は嘗て或る本を読んで感じたことがあります。それは昔キリストが多くの道を求めに集つて來た人に、一々「汝何を求むるぞや」と尋ねたと云ふ事です。而もキリストは其の人が何を求めに來たのかを初めからよく知つてゐたこのことです。然にそれにもかゝらず、彼が之を其の人に尋ねたと云ふことは彼がそれを知りたいが爲めではなくして、今現にそこに求めに來たその人をして明に自分が何を求むるかを深く自覺せしむるが爲めであつたと云ふことです。私は此の事を讀んで之は實に面白いことだなど思いました。そして、實際、世の中にはかうした人々が多くあることを感じました。何にか人でも多かつたかつて居ると何か知らんと私共でも立止つて之を見ることが度々あります。そしてまた、あすこに誰かの話でもあると聞く私共にもどんな話があるか知らずこれを聞きに行くこともないとは限りません。而もさうした意味で世の中には多くの宗教の話聞き、又それによつて可なりなる爲めになるやうな事もあり、又一時心の疲れも慰めて貰ふやうなこともあるのであります。

乍然かうした程度の話はまたかうした程度のことからで終るのが常であります。だから若し私共に何かそれよりも面白い話だとか、或はそれ以外に別な用件でもありますと決してそれには寄付きもせないのであります。従つてそれ位の程度の話や講演として私共の宗教を聞いたり喜んだりする人の

あるのも無理からぬのでありますが、そんなことではあきたらぬのが私共の要求であります。否、少くともさうした程度の人生観や求道ぶりではどうしてもあきたらぬのが私共の生活であります。古來道を求めて眞に生きやうとした人々は皆悉くが身命を屠しての求道であり、又身命を屠しての道の宣傳であつたのであります。それを今頃の人々が單なる一時の気まぐれや、なぐさみ半分に之を求め之を開く人のあるに至つてはそれはあまりにも不徳のことであると思ふのであります。

二、昔の求道者

それに對しては少しく、昔の求道者を視るに限りません。彼の釋尊が求道の態度はいかゞでありましたらう。自ら皇太子の位にあり、後には一國の國王たるべき御身であり乍ら、而も自ら之を捨て、自らの父母や妻子までも後にして、獨り山に入つて道を求められた如きは其のいかに道を求むるに眞劍であつたかを物語るものでありますまいか。其他孔子やキリストの求道の如きに至つても實に其の眞劍なる態度は常人の全く及ばぬ所であります。其他我が日本の一宗の祖師達とも崇められる人々のいかに道を求むるに眞劍であり、熱心であらせられたかも、少しく其の道を研究する人々の等しく知る所でありまして、誰一人として之等の中に道を求むるに身命を屠してかゝらなかつた人とは無いのであります。

而も之等の人々の求道ぶりを視ますればそれらは決して一時の心の慰めや、或は一時の講演や講話の立開きではなくして、全身をそのことに没投して、數年若くは數十年、否殆どその人の一生を之に投じて止まなかつた人たちでありました。而も、其の求むる所には必ず求道の中心があつたのであります。そして其の中心とは一体何でありませう。それは即ち彼等自身が眞に生くるの道であります。

此の意味に於て、今時の求道者は一体何を求めてゐるのでありませうか。眞に生くるの道、即ち眞

生の道を昔の人は献身の努力を以つて求めたのでありますのに、果して今時の人々は此の心を以つて眞に道を求めて居るでありませうか。私は疑いなき能はずであります。從て今時の人々に對して、今キリストのやうに「汝何を求むるぞや」と尋ぬる人がありましたら、我何を求むとハツキリと言ひ得る人がありませうか。私は常にそれを悲しむものゝ一人であります。何故に人は今少しく眞劍になり、今少しく自らの求むるものに向つて自覺しないのでありませう。之私が不肖の身を持乍ら尙且つ之を高張して止まぬ所以であります。

凡そ人として此の世に生を受ける限り何ものかを要求してゐないものゝてはありますまい。乍然その私共の要求にも色々あるのでありますが、其の色々な要求の中、何が一番大切であり、何が一番中心でありませう。凡そ人の生活には色々な要求があります。そして其の生さんが爲めには又色々なものが必要でありませう。乍然人間一生を通じて、眞に私共に無くてはならぬものがありませうか、而もその中で何が一番大切で、何が一番根本でありませう。

斯くの如く人生一生に渡つて人間生活の要求を反省し、之を批判して其の最も大切なものを取り出し、其の最根本なるものを發見して、而もそれ以外のものを選び捨て、其の大切なものを教養し完成して一生をその爲めに献ぐることは私共の限りある人生に於ては最も重大なることではありますまいか。世に生き涯いある生活とは即ち此の意味の生活を云ふのでありませう。

三、人生の最大要求

私はかうした考へから、人生の最大要求を永生と向上の二つに置くのであります。永生とは自分の生命の問題であります。そして向上とは自分の價値の生活であります。前者はどこまでも死にたくないの要求であり、後者はどこまでもよくなりたいの望みであります。而も此の永遠に死たくないと云

ふことと、どこまでもよくなりたいたいと云ふことが私共の根本の要求であります限り、凡そ人生生活に於て此の二つの満足せらるゝは人間の生活として樂しくも亦喜ばしいものとてはありますまい。従つて人類の生活に於て此の二つの問題が遂げられぬは悲しいことではないのであります。乍然世間の多くはこの二つを誤まつて反つてたれを自らに妨げてゐる人が多いのであります。否それどころかともすれば世間の多くは此の二つを誤つて自己の永生と向上とを損けつゝあるときさへないとは限りません。

永生とは死に對するの不死の言葉であります。乍然こゝで云ふ不死とは所謂永遠の生命としての不死でありまして、單なる死の否定ではないのであります。即ち有限なる人生の一生を超えたる不死の生命を云ふのであります。人は此の世に於て死があります、而も五十年か六十年、永くて百年か二百年は保てません。必ずそこには生に對する死があります。而もそれは私共自身に於て必ず早晚に來るところの事實であります。人の死ならばまだしも、自分自身が此の世に於て、目前に死を迎えねばならぬのが人生であります。

乍然この五十年か六十年前に此の地球の上に生れて來た私共が、今此の地球の上に死なねばならぬとしまして、人生の一生を考へてみますとき、幾多の古人がやはり私共と同じくさうして生れ、さうして死んだのだと考へますとき、一種云ふことのできない一つの淋しさが感ぜられてならないのであります。殊に此の宏大無邊なる天地の間に於て、此の大自然の姿を表てからのみ眺めますれば實に諸行は無常にして、謂知れぬ淋しさに打たれるのであります。

茲に自分達は自分のこの死を思ふとき何故か一つの淋しさを感じてなりません。そして、一体自分と云ふものは何であるかと考へざるを得なくなります。かうして一切を考へ一切を眺めてゐる私がこのまゝ此の地球の上で死んでしまふのであらうか。肉体としての此の身が死んでしまふことは何とし

てもいたし方はありませんが、その爲めに私が永遠に死んでしまふと云ふことは實に堪えられない淋しさであります。而もその私共の身心の更に根元なるものとしての我はないものでせうか、かく云ふ私の主体そのものは何であらうか、一切の生命の源としての我なるものはないであらうか、自分と宇宙とはいかなる關係にあるか、宇宙の本源は如何、万有の本体は何であるか、宇宙と人生、人生と宇宙……

かうした考へが私共の心に思索されて來るのであります。さうして其の求むる所の根本中心が何であるかを深く反省して來ますれば即ちそれが私共の生きんとする生命の要求でありまして、此の要求が即ち不死の要求から出たところの永生の自覺を求むる要求でありました。

尤も單に死にたくないとの要求はすべての生物にもあるところのものであります。而もそれが自覺的に反省せられて、永遠の生命を求めて、そこに不死の自覺を發見するに至つたことは餘程に人類の文化が進歩した後のことであります。而て之を最も明にハッキリと私共に示してくれたのは阿彌陀佛を中心とする淨土教の教へであります。此の意味に於て、私共が先づ永生の自覺を求め、不死の要求を充たさんとすることは道を求むる人の最も大切な一つの事柄であります。

四、永生と價值とに就て

ところで私達は此の人類の生活に於て、たゞ永劫に死なないと云ふだけでは未だ一つの物足りなさを覺ゆるのであります。それは一体何故であります。

それはたゞ一つの生存は單なる一つの存在に過ぎぬからであります。尤も、その單なる存在と云ふことも、現に存在してゐる私共にとりましては一つの大切なるものではあります。少くとも今日までの私共の實際生活に於ける經驗からしますれば、單なる一つの存在では所謂單に徒に此の世に於け

る肉体の死を待つに等しいものでありまして、そこには私共の生存の意義を感じる事ができぬからであります。所謂單なる不死と云ふことのみでは私共に生き涯いと云ふものを感じることができぬからであります。

従つて私達には何故か、そこに生存の意義を發見し、そこに人生の價値的生活を充たしたいとの欲望があるのであります。少くとも偽りよりも眞を愛し、醜さよりも美を好む、惡を欲せずして善を求むるのはこれ人情の常であります。其の他天地の大道を發見し、天地と共にある生命の喜びを捷ち得ることは少くとも私共の常に經驗してゐる事實の生活であります。

乍然その偽にあらすして眞なるものとは一体いかなるものでありませうか。又醜いものと美しいものを何によつて眞に區別することができ得るでせうか、惡の惡たる所以、善の善たる所以を明にして、人生の眞意義を完ふしやうとするならばそこには限りなき人生の苦悶があらはれて來ることを感じます。

だから世には所謂實用主義者なるものがあつて「其の時その時の都合によつて、都合よき生活をして行けばよいのである。そんなつまらない、永生だの、價値だのさわぐ間に多くの人生は過ぎてしまふのだ。又此の世の多くの人間がそんなことを云つてゐる暇はない。それよりも、その日その日のことを都合よくやつて行け、それが結局人生だ。自分の今日の事もできずに何にが理想だ、理想よりも現實だ、現實を少しづつでもよくして行くことが即ち理想でなくてはならない。世の中に絶對なる理想などはない。理想は相對だ、だから永遠の理想など此の世にあるべきものでない。天國だの極樂だのと云ふのは皆此の世に於ける其の當時の經驗に現はれた抽象概念に過ぎないのだ。だからそんな世界は實際にはあり得ない。従つて天國や淨土の考へも又時代が異なるに従つて變つて行く、それを永久に變らぬものとして之を信じ、之を求めやうとすることは即ち宗教の迷信だ……」と。

乍然こんなことを云ふ人々は未だ眞實に人生を深く考へない人々の言葉に過ぎませぬ。従つて未だそれらの人々は眞に人生の尊さと宇宙生命の偉大さを知らない人々の云ふことです。従つて其の日暮の人生では人生の眞の尊さが見えぬのです。永遠の生命に廻り、限りなき人生の尊さを自覺して、献身の活動を此の世に残した古來偉人の生活には少くとも私共の永生の喜びと向上の生活とが輝き渡つてゐるのであります。言換ればそれが即ち宗教の世界である。眞と善と美との統一の世界に於て宇宙の生命たる如來を中心とする人格の生活であります。謂換れば如來を中心とする救いの中に永生と向上との生活を營むのであります。而もそこにこそ日常の生活をも無視せず、喫茶喫飯これ悉く如來の慈光に生きるの生活となるのであります。

之私が道を求むる者に深き求道の眞意義を反省する所以であります。(三、一一、七—同二三、再校三校)

遇 感 一 二 土 屋 觀 道

先づ實行の人たれ

□法然上人が念佛のことについて「たとひ念佛のいはれを聞くと雖も、之を信ぜざれば聞かざるが如し、たとひ念佛のいはれを信ずと雖も、之を稱へざれば信ぜざるが如し、念佛は常に申すべきものなり」と云はれたが、このことは思へば思ふほど實に尊い感じがする。

□世には能く宗教のことをあれかれと云ふ人がある。乍

然それだからと云つて、必ずしも其の人が其の宗の信者であるかぎうかは疑問である。そしてまた、よしそれがその宗の信者であるからと云つても、果してそれがその宗の實行者であるかぎうかは更に大いなる疑問である。□其の他之を教育家に見ても、道德家に見ても、之と同じやうな人の甚だ多いのを私達は見るとではないか。人は永生の道に進め、向上の道に精進せよと、よく云ふが、乍然之等のうち、果して幾人か之を信じ之を行ふ人があ

るであらうか。

□かう考へて見るに、此の法然上人の御言葉が今更のやうに新しく私共の心に深く響くものがある。徒に道を聞いても、之を信ぜぬではそれが何になる。そして又、それを信じて之を實際に行はずばそれが何の信であらうか。

□要するに、それは信じたのでもなければ、又聞いたのでもないのだ。それを私共はまあ、聞かぬより聞いたがましだ、信ぜぬより信じたがましだ位に考へて、之を實行にまで思ひ及ばぬと云ふことは之を法然上人の御言葉に照して私共は今更のやうに教えられるものがある。

□それについて、私たちは果してそれだけ念佛のことを聞き、之を信じ、之を行じてゐるであらうか、眞に生き眞に道を求めやうと欲するもの、私共はそこに深い反省がなくてはならない。私はとくに此のことを近頃の道友に告げたい。(三、一一、七)

國体の精華と國民の自覺

□我が國体の精華と云ふものがあるならばそれは上天皇が國家全体を代表して立ち給ふところにある。従つて民の心と君の心とが一にして不二である点にある。所謂

君民一体にして、君の外に民なく、民の外に君なしと云ふことだ。

□而して、此のことは實に我が國有史以來の史實であつて、君の生活が民の生活を無視せられたことがなく、又民の生活が君の生活を無視したことがないので明である。仁徳天皇であつたか「民の富めるは朕が富めるなり」との御言葉の如き即ちそれである。

□従つて、我が國の天皇はいつも、國民全体の上に君臨し、國民全体の幸福の爲めに御心をくだき給ふのが常であつて、そこには何等の私がない。従つて天皇は常に君民一体の太心の上に立ち給ふのであつて、單なる貧民の爲めでもなければ又特に一部の貴族や富豪の生活の爲めでもない。

□だから、我が國の前途には決して、一部階級の私すべき政治も政策も之を許すべきものではなく、常にそこには國民全体の幸福の上に陛下の御心を拜すべきである。従つて國家の代議政体が此の心の上に行はるべきは言ふまでもないことである。

□従つて、今後の日本の政体について、私共の常に考ふべき事柄は決して、自分一人の國家にあらずして、國民全体の國家であり、君民一体の國家であつて一部階級の私すべき國家でないことである。従つて我國は君民

本主義の國家はないのである。

□然に今日の社會、今日の國家は果して此の我が國体の本然の理想に相叶つてゐるであらうか。そこには一部有産階級の貴族や資本家の都合のみ計らうとする爲政者が居りはせぬか、そしてまた、之と反對に此の日本を一部の無産階級によつてのみ横斷せんとする徒輩はゐないか

□そこに私は少くとも帝國の將來に向つて甚だ面白からぬ思想と生活の危険とを感じるものである。而て之は主として君民一体の我が國であることを知らないところから來るのである。(念)(三、一一、七)。

(私は十日の即位式に於ける陛下の勅語を拜して此の説の愈々眞なるを喜ぶ。表紙と併せて御一考を乞ふ)

道友の計に接して (感じたまゝを)

土 屋 觀 道

□吉田そめ子様の計

神奈川県三浦郡吉井村の眞福寺の令室吉田そめ子氏は行年七十四才で去る十月八日往生の本懷を遂げられました。女史は、十年ばかり以前から熱心な光明主義者の一人であらせましたが、本年七月頃から少々胃を犯され、病床に伏すること一ヶ月餘りでした。愈自ら立たぬと云ふ覺悟がつかれたのはその後も間もないことであつたが、萬事一切を如來様に任せ、床の中でも念佛中心に一切を過された由であります。

私は此の事を聞いて、かてからの道友のよしきでもあるし、御心の程も知つてゐるので、一度御訪しやうと思つて居りましたところ、先方でもたゞ一つそののみを願つて居られたとのこと、色々の用事の爲めに私の願ひは仲々に達せられませんでした、

それではならぬと萬事を押し切つて雨の中を神谷善之進氏と二人で御見舞に出發しました。

其の日は己に夕方でも豪雨のことでもあるし、道友の引きめもあつたので、翌日になつてその病床を訪れましたらば全く昨夜から危篤との事でした。靜に合掌し十念して、浦賀の八幡へ引上げますと、それから三時間許りして息を引かれたとの事でした。それには何等の苦しみもなく、全く安らかに眠るが如く、息絶へて更に神々しさを益すのみでした。

女史は此の世に於て、全く思ひ置くことばはない、只一つ自分の氣にかゝることがあるけれども、今はそれももう如來様に任かすより外に仕様がな。若しできることならば此上のはたゞ一度土屋に會ひたいとのことであつたとのことでした。

然に女史は今やその最後の望みを達して所謂此の世を去つて如來の絶對界に歸られた。人として之以上の本望があらうか、私は心から女史の靈光の更に一層に高きを感じる。

私の多くの信者の中で、女史はその中のまた一人であつた、而も其の熱心にして、念佛に専心なる、全く専修一行の道人であつた。色々と理屈を云つたり、側き道に走つたりするやうな人では全くなかつた。そしてまた私を信じて、その中に念佛の一道を進まれた人である。だから、私としても亦その人を慕ひ、その人を信じて尊んだ、意思相通すると云ふのはかうした間がらのことである。殆ど唐澤、清水、行基寺と云つたやうな地方の主なる御別時にも皆参加せられた。老人の割りには全く若かつた。身心を忘れて慈光中心の念佛生活に生き生きさせられた人であつた。そしてまた御主人に對しては限りなき誠を盡され、たつた一人の娘子には又此上もない親切であつた。

何と云ふ幸福な彼の人であらう。私は今もかうして思出してその人の至幸をたゞ、必ずにはあられない。そしてまた私は今後さもかうして私の心に入信の人として、念佛生活の道友として私の心に永く輝いて頂くことを心から喜ばすにはあられない。そしてまた、それが私としては此上もない感謝の一つである。

■藤村健三氏の訃

氏は大阪の人である。今から四年の昔、大阪高等商業學校の在學中、河内の得生寺の秋の三昧會で入信せられた方である。程なく病床の人となられたが、幸いに信仰の人となつてゐられたので病氣の進んでゐる割に平氣で居られた。否平氣どころか後には全

く病氣の一つの喜びさへ感謝せられた時がある。

病床に一時のことに過ぎぬ、人生は何れ有限である。而も此の一時の病床と有限の人生に於て、限りなき如來の慈光を悟り、自らの永生と價値の生活を知ることは果して病いなき青年にして此の信仰なき人に比べて何が幸福であらうか生きると思つた多くの人々は死し、死すると思つた多くの人々は生きるのが多くの常だ。肉にのみ生きて靈に生くるを知らない多くの人に比べて藤村氏の死は肉に死して靈に生くるの生活であつた。否それどころではない、氏の病床にあつて反つて一家の人々を救つたのであつた。即ち一家はその爲めに如來を知つた。そして初めて念佛の世界を見出した。そしてまた道友の人々の健三氏に對する眞情を見ては人心の奥底に人の心の念佛の誠を知つた。

二年も三年もの永い病床のことで、そこには病床の苦痛もあり死に對するものだとも全く無がつたことではあるまい。そしてまた一家の父母弟妹たちにも、時にはその爲めに心を闇くし自らそれに悩まされる時までも全く無かつたことは云はれまい。乍然それにもかゝらず、此の悩みと苦しみの中からは、そこに限りなき如來の救いが一層に輝いてゐることを全く見られないと誰か云い得やう。苦しければ苦しむ、たよりないほどそこに輝く念佛の一路が一家の上に病床の友には云ふまでもなく、父君の上に母君の上に其の他の弟妹の方々にも限りなく輝く念佛の光を見られたに違いない。

私の如き、何の因縁にや、殆ど毎月の如く、又隔月の如く、大阪に行く度に殆ど病床を訪れない日とは無つた有様である。た

つた一人の友ではあるが慈光の中に靜に安らき、私の來るのを待つてゐていただくと思つたとき私はどうしても万難を排して之を訪れずには居れなかつた。そしてその爲めに一家の愁眉を開かれるのを見る事が一つの私に與へられた眞の仕事果すかに思へてならなかつた。

友と云ふ友の中に、道を同じうする友ほど親しくも亦なつかしいものはない。そこには老いも若きも、貴きも賤しきもない。男女や貧富の區別などもさよりあらう道理もないが、そこには永遠に輝く道友の睦みのなつかしさ、またなき心の喜びとが相流れて止まぬものがある。

更に私の喜びはそれ許りではない。かうして亡くした道友の嬉

しさは私の心に永劫に一つの安心を與へるものがある。それは外のことでないが、もう一度此の世を去つて佛界に入つた人には再び信仰の退轉がないことである。さうして、其の友こそは私と永劫の道を同じうし永遠に眞の道友として共に働くことのできるからである。さもない友は十年の友にして一朝の誤解からお互に思はぬ離別をよきなくされたたり、或は僅かの利慾から反つて眞實の信仰をさへ失ふことがあるからである。

之に對して已に此の世を去つた道友には全くかうした憂いがない、之私が亡き友を思ふにつけても心からその友をなつかしみ又心から之と交つて今も喜ぶ所以である。(C. H. H. D)

吾朋便り

▲津島町 中野善英様より

其後は絶えて御無沙汰仕りまして何とも申譯の次第も御座いません。何だか御在京ではないやうな氣がして御手紙を差上げる氣乗がせなくて何處に御出になるか知らんとそればかり案ぜられてなりませんでした。ところが昨日大垣へ参りまして佐藤先生の娘さんが永らく御宅に御

邪魔になつてみえて最近御歸りの由承り御自身よりも色々御家庭の御様子承りそれで御在宿であつたか今更ながら御なつかしく、御説をかねて御氣元何ひに及びます次第で御座います。

毎日御二階へ籠つては緊張した御勉強ばかりと承ては本當に私が鞭うたれやうに感じ本當に心強く感じました。何だか

シツカリやらねばならぬといふ氣が御上人と同じやうに私にも強く感じられて來ました。このように御上人にも必ず感じてみえるだらうといふ氣がしてなりません。人はどうもて呉れやうとさうけなして呉れよう自分自分満足出來るようにならして貰はなければならぬといふ氣がします。自分といふものの、内容はどんなに發表しても理解して呉れた様でも終には全体は開顯せられる事なく不可解不可存のまゝにて世に埋れ

てゆくものだから——この自分といふものの、内容、大切に大きく深く一層尊いものに育て、置かれねばならぬ気がします。だから最早側からの細々した云ひ添へや注文にはそう／＼應じて居られなくて真しぐらに自分の完成自分の内容充實に進まずに居られませんか。長いようでも短い人生だし、澤山仕事が出来るやうでも大して仕事の出来ぬ人生だから、そう／＼人の注文ばかり気にしてゐる「自分の事」が一つも出来ず仕事半ばに日が暮れる目にあはねばなりません。だから時には、子供の要求も妻の要求も世間の要求も遠慮なく踏み潰して自分の事をさして貰ふ事もあります。かくして本當に自分の爲めになる事なら矢張り彼等の爲めにもなつてゐる事を自覺いたします。だから我儘かも知れぬも、この踏みつぶしてやる元氣も「同情してやる心」と矛盾せず又大切なものださつく／＼教へられて來ました。

先が短い——早く完成したい——といふ念の強い御上人方には一層こうした御心も強いのでないかと思ひます。眞實強

い求道者にはこうした一面冷いところが常に在ると思ひます。對象が大きい丈けに俗受けするやうな温さがなくて眞の冷さが却つて焼け切るやうな暖さである場合が私共にも本當に欲しいと思ひます。對手に惹かれて對手のために「よかれがし」さなつたときには温い人になるが、自分に選つて自己の爲めに生きたときは冷い人になります。

この兩面のうち一方だけ傾かず一方だけの人間にならず中庸を得て眞に冷温相半はする本當の強さが欲しいと思ひます。長々しい繰り言になりましたが御讀書の暇の御なぐさみにも御伺ひに及びました。日増しに寒くなりますので御からだを御大切に。奥様や御子様方にもよろしく。

▲神戸 藤村章様より

前便にて申上しました通り健三事二十五日零時十五分、御佛に召されて安らかに参りました。一ヶ月以前より少し肥へて参りまして病氣の進行もみえませんが、午前午後とも椅子によりましたり庭へ出たりいたして居りましたのでよもや本月

中に死別いたしますなど、は存じがけませんでした。尤も兼ては覺悟いたして居りましたが二十四日夜突然呼吸促進を來しまして酸素吸入を始めました醫士が六ヶ數からうと申されますので大阪へ電話なぞかけ主人に歸宅してもらつて居りました。夜中うづら／＼いたしまして夜明をまちかねいつになく自分で南枕にかわりまして、御上人様の御尊像をちつとみつめて居りました。後に考へますれば、御上人様に永き御別れを申上っていたのかと存じます。呼吸も樂になりました。たゞ安らかに眠つて居るやうに存じて居りましたら少し頭を上げたこと、存じましたら、すでに臨終で御座いました。少しの苦痛も御座いませす安らかに清き終りで御座いました。私共も聲のかぎり念佛させて頂きました。其刹那の尊き心地は信仰に依りまして始めて味ふ事の出来る事と存じます。我子の死に對して持つ親心を漸く別の安心いたしました氣分で御座いました。

生前御上人様に頂きました尊き御教示病中幾度となく御訪問頂きました健三の

よろこび御ささしの言葉はいつも／＼申出て味ひ感謝いたして居りました。御高恩は到底口にも筆にもつきぬ事で御座います。

大阪眞生同盟の皆様方尼ヶ崎の皆様方の方心からなる御通夜、葬儀當日の御心盡しは涙ぐましい有難さで御座いました。長圓寺様、圓平寺様、月江寺同盟の皆様宅にて告別式を営みました時の御念佛には親戚知己の方々共に熱心なる御念佛に感激いたして居りました。早速御禮なり右申上たく存じながら日々の訪問客にて延引相成まして申譯御座いせん、いづれ御拜顔頂きました時万々申上ます合掌。

▲遠藤ふじ枝様より

土屋先生

御別れ申してから最早六年になります其後先生にはます／＼傳道に御忙がしく御暮らしの様に存じます。私もおかげ様にて今日では平安に暮らせて頂きます。先生にも三人の御子様がお出来になり今年に男の方さへ御生れになりごんなにか御喜びのこととせう。私も結婚して十年

目に子供を恵まれ幸福さは此の様なものかと思ひてゐましたが、今年の夏わづか三四日病んで四才のみじかい生命で亡くなりまして。その當時の悲しみ只一人子を失つた悲しみ、可愛いと云ふよりも有がたいと云つた氣持ちで育て、來た子を急に失つた悲しみは何んとも云ひがたい悲しみでございます。今尙悲しみは去らず胸が一杯で困ります。けれど亡き子より與へられた家庭の圓滿は失はれは致しません。もつ／＼不幸な人もあるのだと思ひ、一家は感謝の中に暮して居ります。私も御逢ひ申した當時から一二年非常になやみました故か病弱になり主婦のつさめも満足に出來ずに居ります。でも弱いかからだの私を皆が面倒を見て下さいますので喜んで居ります。眞生の謫代を一向お送り致しませんでした。眞生の謫代をたにもか、はらず、原吉郎様より毎月御送り下さいまして有がたう存じました。眞生はくり返り拜讀いたしましても無信仰の私は理かに苦しみどころが多ございます。でも時々わかりますところは此の上もなく嬉しく自分の様な者でもな

ごやかな氣持ちになり感謝も深められて行く様に思はれます。何時先生の著書が発行されますか、發行されましたら拜させて頂きたいと存じてゐます。謫代金五圓すくないけれどお送り致します。御受け取り下さいませ。ではおからだを御大切に遊ばしませ。私も腦を悪くしてゐますので筆をこころが一番悪くこれでお許しを頂きます。

▲岐阜縣 行基寺 山田淳應様より

去る九月岐阜にて御目にかゝり、其後御無沙汰致候。乍然毎月の眞生紙上にて拜謁致し世尊の御言葉の色の上に拜せす紙上を通して御上人のみに合掌致し居候。特に本月號の宮崎寅之助氏を御訪問なされし御模様を拜し御上人の心の程さ、宮崎氏の現在の御心の内を遙察し感涙と共に特に吾れ／＼修養の上に覺悟する處多大あるを覺へ申候。神の生活佛の生活コンと身も心も慄然たるもの有之候。就て宮崎氏の著書何か有之候事、發行所書籍名を恐御示し願上度御依頼申上候。向寒の候皆々機折角御自愛祈り上げ候。合掌。

▲名古屋 本多豊七様より

御上人様始め皆様には如何御暮して御座いますか、去る唐澤の御別時には澤山の方々はさぞ御満足せられし事と存じます。私事皆様がお誘ひ下さいましたが残念乍ら参加させて頂く事が出来ませんでした。

而し、本年は御祖母さんと妹が参加させて頂きまして昨年よりもシクリ修養させて頂きましての私に喜んで居る次第で御座います。

私も行基寺様の御別時やら黒宮様のお別時に参加させて頂き、少しづつとも心が變つて来た様に思ひます。

信仰の生活と言ふことが少しづつとも知る様になつて参りました。此れも皆御上人様の賜と存じます。

本月はお休み月とて私も非常に待ちごうしくなりませんが、私ばかりでなく必ず皆様も同心と存じます。

▲名古屋 早川孝祐様より

御上人様 ほんとうにありがたう御座いました。

唐澤山、こう思ふだけでも胸がドクドク

又もあの荘厳な唐澤山での世界を想ひなつかしい回想にひたつて居ります。

初めて心から自分をしみんと省みさせて戴き、つゝまじ合掌の心の中に迷へる者に照されてあつた導きの炬がみつめられました。只ひとへに光に照し出されてある自分を素純な心を以つて育て上げて行きたいと願つて居ります。又、お疲れの所をかねて憶れておりました都の地を見せて戴き、重ねて深く御禮申上げます。歸途沼津へ立寄りまして過ぎし別時の御教導を傳へ一同共に喜ばせて戴きました。殊に叔母とは二日も徹夜致しとう／＼引とめられまして十八日迄滞在致しました。關様も沼津の方へお越し下さいまして心ゆく迄語りました。家へ歸りましての父母の喜びは一方ならず何だか家中の空氣が随つた様でござい

廿日から本日迄晝間は講習に参り夜は唐澤のお土産話にふけりました。

廿日の夜は病床の友を慰め、廿一日は古賀様、全興様、小川様（大垣）等が御出で下さいまして愉快な念佛會を致して

クするほどの喜びで御座います。眞實の自己を見つめる事の出来得ました事は何とも云へぬ喜びで御座いました。年來の望みであつた唐澤山の集にいらせて頂いた、それが最早や私を目ざめさせて頂く第一歩で御座いました。ほんとうにいたらない私でありました。つまらない淺間しい私であつた事が深く反省させられました。

日々のお話、私一人にきかされてゐるやうに思はれてなりませんでした。そして深くしみ込みました。念佛の尊さが層一層深く味はさせて頂きました事は只々合掌の外ありません。すべてが此眞劍な合掌の中にふくまれてゐます。

こうすればこうなるといふ理屈だけは分つてゐるやうに思ふてゐる私は、ほんとうに愚かものでした。如來様におすがりさへする事の出来ない私であつた事がお山を下つて今餘計にはつきり致します。でも／＼今はほんとうに如來様におすがりの出来るやうにならせて頂けました私、ほんとうに／＼うれしう御座います。すべてがのび／＼としてゐるやうで

戴きました。昨夜は又他家へ参つて居ります私の只一人の弟と語り弟は心から感激し「しつかり生きるのだ」と涙を浮かべ叫びました時、ほんとうに言ひ知れない嬉しさに涙しました。

御上人様 限らない恩寵裡に私は自分の天分を育み、たえまない試練の前にも勢一つばいの努力を惜しまないで存じております。何卒よろしく御指導下さいませ御願ひ申し上げます。

▲名古屋 山本松乃様より

御座います。是れと申しますのも一重に如來の御恵みとお上人の御力さによるものと厚く感謝致します。お話中に度々泣きました事も決して無意味の涙では御座いません。私をして強く生かすむべき喜びの涙なので御座います。

暫らくでは御座いましたけれど此後の生活の上に大なる教を給はりました事を深く御禮申し上げます。是れからは此の体も有意義に及び出来る限り人間らしく価値ある生活が欲しいものと思つて居ります。再びお上人にお目にかかりませ

御座います。

忙がしいとされてゐるお氣もすぎました。例年は何さなく功利的のやうに考へてゐたらしいので忙がしいとか何さかの氣持であつたのが今年のお盆はほんとうにすつきりとした氣分でゆつたりとすま

す事が出来ました事をつく／＼私は喜びます。そして一軒／＼亡き人々を心から思い忍ぶ事が出来ました。尊い而も惡まれたお盆でありました。

今後は此の氣分ですべてにあたる事が出来るものと存じます。お念佛してゐます常におこりつばい私も知らず／＼に腹立てずに忍ばせて頂けるやうになります。尊い事で御座います。ほんとうによ／＼師匠にも心配をかけました私は恥かしうてなりません。心からおわびしてゐます。

▲美濃 辻芳子様より

今し講習を終つて歸りました。私は、

時にはせめては幾分なりと眞實の自己に歸りお目にかゝらせて戴きたいものと思ひます。

▲綾部康雄様より

編輯部へ

土屋上人の御懇篤な御指導により眞實の佛法に遇はせて頂いた事を私は心から喜んで居ります。

唐澤では皆様に大變御世話になりました、御親切厚く御禮申上ります。

來年の夏も亦、皆様の御鞭撻を仰ぎ度いと思ひます。

御器所の伊藤様、崇徳寺様の御集りで行基寺様、百々先生の御指導を頂き、又皆様の御引立てで御念佛を充分に相續することが出来、唐澤以來段々ゆるんで参つた私のネジを捲き直して下さつた事を有難く御禮申します。（唐澤でも居睡を日課とした私崇徳寺様でも念佛中二回、御講話中一回無我の境に入りました）

私を知る總ての人が、私を常に光明の方へと手を曳き腰を押して下さつて居るさむかじうしても思はれません。

□土屋 親道

昨今の私近頃の私は全く二階の人となつて居ります。割合に勉強にも慣れた爲めか全く外出さへも縁にしくなりまして。朝暮晩さ机の前に坐つたなりです。それも讀書が主となつて、こゝ暫くは全く筆を採りませんでした。たまたま出れば本屋あさり位です。乍然それも程度がありますので自然引込み勝になりました。本月の眞生誌が運れたのも全くその爲めでありまして自然に遅れて申わけがありません。わざと遅らしたのではないが無理に筆をとつてもつまらぬからであります。

の客を擧ますれば、先月の初めにかけて神戸の藤村(よれ)様が見えました。また名古屋の渡部善兵衛御夫婦も訪れて頂きました。越後からは佐藤益章様及び令弟御母堂等の御出あり、又三條から谷二三郎氏も御訪れ下さいました。次に桑名の五井様の奥様も久々で御訪れ頂きましたことも嬉しいことでした。神谷善之進様や谷口春沙都さんが御出で下さることは云ふまでもなく度々ですその他浦賀の伊藤幾子様や長島の奥さんなども見えました。私から出て行つたのは浦賀の眞福寺の奥様の病氣見舞と先月初め大正大學生の爲めに坐談會へ一日出た位です。否其の他思出した所によれば

先月来から本月初めにかけて、九州の方から立川圓月上人や田中眞徴上人の三四日の宿り客あり、又今月の月初に清水實相寺の中村弁康上人が御出で下さいました。上野の院展を帝展を見、又一二ど氣晴に活動を見に行きました。各地の道友から色々の送りものや御手紙に接して其の心情を暖めて下さいましたことを深く感謝いたして居ります。それにしても之から愈寒さにかゝることです。ですから道友各位の御身御大切のほどを願上ます。(三、一一、一三)

定価 一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 親道

發行所 眞生社

名古屋市中區隅田町二番地

印刷人 百々治之助

名古屋市中區鍋屋町二ノ一六

印刷所 眞山田活版印刷所

電話東(4)二六五・七五五

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

廣 告

誌代未納の方々に告ぐ

創刊以來七年の永きに渡り今日まで御愛讀を得たことは同友一同の歡びとするところであります。乍然其の後誌代未納の多い爲めに、其の經營上大に困つて居りますから幾分づゝなりとも御拂ひ込みのほどを願上ます。振替で御面倒ならば御申込次第集金郵便にいたしますから此の際特に御拂込のほどを願上ます。

回十二月號は都合により休刊にいたすかもしれせんから左様御承知下さい。

(大正十四年八月十三日)

昭和三年十一月二十日印刷納本

(毎月一回十二日發行)

第七卷

第十號

郵便はかき



東京都港区芝公園地

十号地ノ三

土屋観道久

相済み大久保

電島順弘様

郵便はかき



東京都港区芝公園地
観智院

土屋観道久

十一月二十三日
静安寺七町三ノ二
(静安寺内)

西米生来小嶋

前男 昭日 突然 欠主 致一 種々
御所 慶也 戴之 有難 御所 申
王 子 年 其 後 孝 弟 子 部 以
所 期 之 男 子 之 連 一 人 吾 臣 之 主 旨
歸 相 致 一 年 以 致 御 所 之 下 主
向 所 在 產 祝 之 所 分 以 欣 之 家 由 女 子
崇 大 之 道 一 申 后 子 年 不

念 孝 弟 之 旨 是 然 年 上 所 部 之 以 此
一 年 之 旨 後 追 々 整 備 せ せ し 所
る 事 あり ます 然 此 後 來 年 毎 年 以
し せ ず 一 年 相 所 之 旨 則 子 以 花 一 月 以 奉
り せ ば 可 也 又 所 部 中 上 け 等 々
若 新 花 子 之 修 け せ ば 一 様 出 せ ば 少 年 也
所 部 一 年 以 一 年 也 所 部 一 年 也 若 宗
教 國 家 等 更 ぞ 是 教 宗 之 旨 也 心 境 也 也
り ます 所 部 何 れ 也 所 部 之 旨 一 年 也 所 部 之 旨